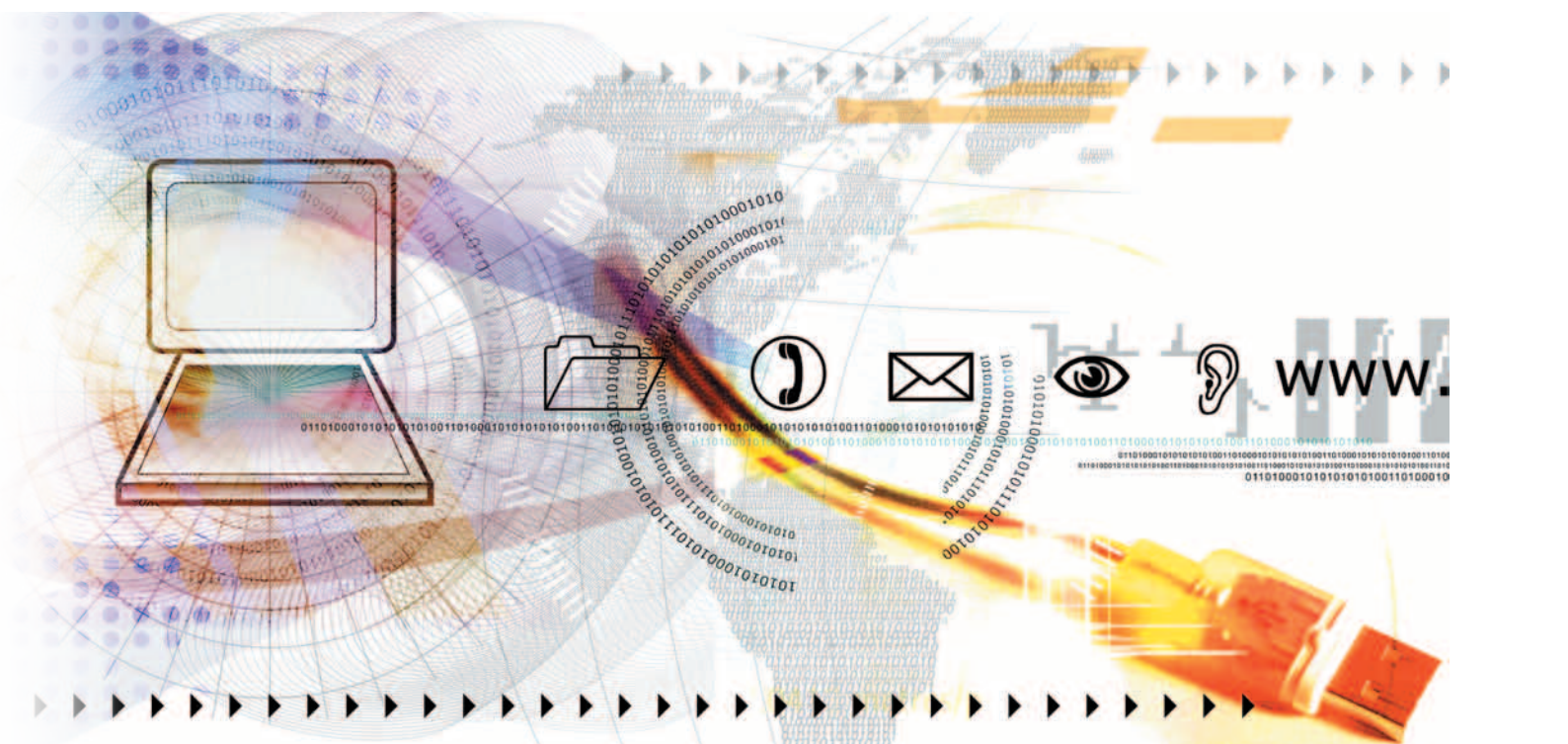




特集

未踏ユースから 育った タレントたち



編集にあたって

竹内 郁雄

早稲田大学理工学術院



図-1 未踏のロゴ

未踏ユースの成り立ちなどについては安村先生の記事に触れられているとおりだが、10年以上の歴史の中で、未踏事業は若いIT人材の発掘・育成に重点を移してきた¹⁾。実際、2011年度には未踏のすべてが25歳未満の若者を対象とすることになった。派生事業として遅れて始まった未踏ユースが未踏全体に成り代わってしまったのである。

これは若いIT人材を盛り立てることが、発展のポテンシャルが高いこと、さらに国の税金を注ぎ込むという意味でのコストパフォーマンスが高いことが次第に明確になってきたからであろう。2009年につくられた未踏のロゴ(図-1)はまさに「金の卵」の色である。人口減少、経済の停滞、産業空洞化といった、いわば縮小傾向のスパイラルループにある日本のさらなる衰退を止めるには、若い人に投資するしかない。いくつかの先端的IT企業が未踏出身者を特別扱いの採用枠とし始めたという事例も聞くが、業界の一部に知られているレベルでは、未踏はまだまだ(本来の意味での)「役不足」である。本特集は未踏ユースで発掘されて育った(一部の)人たちの生のメッセージを、学会の諸兄にお伝えしたいと思い、企画した。

いま未踏を支えている経済産業省、IPA、プロジェクトマネージャが最も期待しているのは、すでに1,000人(未踏ユースは300人)を超えた未踏のクリエイターたちのパワーを、個のパワーのみならず、マスのパワーにもしたいということである。そのために官のみならず、民の力も活用して、未踏クリエイターをコアとするような「先導的IT人材のエコシステム」を形成する努力が行われている。もっと

も、この特集の中の記事からも窺えるように、若い連中の中には、むしろその若さゆえの自由度の高さをもって、自発的に結合し、次のステップにジャンプしている人たちもいる。こういう散発的な沸騰をもっと組織的にサポートしたいものである。日本のような狭い、時差のない国ではシリコンバレーのような場所極限の必要はあるまい。もう、日本全体をITのメッカにしていればいい。

なお、未踏に複数回採択された例が出てくるが、現在は機会を増やすために1回に限定している。

本特集の原稿を依頼するにあたって、未踏ユースでやったことをタネにして、その後の発展・横道逸れなどを書くなら、1人1ページ自由に使ってよいとした。執筆者たちの普段の超元気から見ると全般にややおとなしめの記事になってしまった感はあるが、単に未踏という名前だけを聞いたことがある、ではなく、そこからどんな若い人が育ってきたかを直接読み取ることのできる素材の提供にはなったと思う。「いまどきの若いものは」と言いたくなるのをちょっと控えていただけののではなかろうか。

未踏のように国の事業で10年以上も続くものは珍しいという。これはIT人材の発掘・育成にける関係各位の強い信念のおかげである。つまり、未踏は「未倒」だった、いや、「未倒」である。言うまでもなく、人材の育成は百年の計である。この特集を契機として、未踏がさらに発展することを祈念したい。

参考文献

1) 竹内郁雄：未踏事業11年の軌跡、コンピュータソフトウェア、Vol.28, No.4, pp.3-10 (2011)。

(2011年10月5日)